

恋に過ごせし宵 / エディ・ヒギンズ

ジャズ・ピアノの巨匠エディ・ヒギンズの《ロマンス四部作》の第2弾。《ロマンス四部作》は、合計50曲のラブ・ソングの名曲を4枚のアルバムに収録して、2007年内に順次リリースしていくという壮大なシリーズだ。選曲はこれまでヒギンズがヴィーナスレコードのアルバムに収録していない曲から選ばれた。唯一、「ある恋の物語」のみプロデューサーの要望により、2度目の録音になったそうだ。毎年1枚の新作を出すこともままならないのに、4枚もの新作をリリースするとはヒギンズの大人気ぶりを示している。

ヒギンズがヴィーナスレコード第1弾『魅せられし心』を録音、そしてリリースしたのは1997年のこと。それから今年でちょうど10年目であり、《ロマンス四部作》はヒギンズのヴィーナス10周年を記念するシリーズでもある。また、1932年2月21日マサチューセッツ州ケンブリッジ生まれ、シカゴでプロ活動を開始したヒギンズが、1957年に初リーダー作を録音してからちょうど半世紀にも当たる。ヒギンズ・ディスクグラフィアーによれば、初録音は1956年末か57年初めになっているので、初録音から半世紀といってもいい。また、ヒギンズは12年間にわたり、シカゴの有名なジャズ・クラブ“ ロンドン・ハウス ”でハウス・ピアニストを務めたことでも知られるが、その始まりも1957年。だから、この《ロマンス四部作》がリリースされる2007年は、ヒギンズにとって、ヴィーナスレコード専属10周年、楽歴50周年を記念するダブルでおめでたいアニバーサリー・イヤーということになる。その意味でも、大きな節目となる集大成的な意味合いのシリーズにもなるだろう。

半世紀といえば、大変なキャリアである。尊敬すべきなのはもちろんだが、ヒギンズの場合はベテランになってからますます魅力を増しているところが何よりも凄い。ヴィーナスレコードのこの10年間は、間違いなくヒギンズの全盛時代である。ヴィーナスでの成功は海外のジャズ・ファンにも話題になっているようだが、それも当然といえば当然。ヴィーナスのプロデュースのレベルの高さを僕は海外に誇っている。ヴィーナスのプロデュースは、ストレートアヘッドなジャズ、正統派のスインギーなジャズ、曲の素晴らしさ、そして音質のよさなどにこだわりを示す。いわば、ジャズの王道を行くプロデュースであるわけだが、ヴィーナスの場合は徹底したプロフェッショナリズムを持つ姿勢が一線を画している。ジャズの王道を徹底して追求し、極める。それがヴィーナスの成功の大きな要因だと思われる。そこから正面突破、一点突破の男気のようなものさえ感じるのは僕だけではないだろう。

ヒギンズはそんなヴィーナスレコード制作姿勢に見事なまでに応えてみせた。成功に誰よりも驚いたのはヒギンズ自身かもしれないが、それは同時にヒギンズのジャズ、そしてジャズマンとしての人生を肯定し称えるものになったわけだから、自信がより強まったに違いない。以前よりヒギンズは日本と縁があった。日本人の女性と結婚していた時期があり、長期滞在したこともある。今の奥さんはジャズ・シンガーのメレディス・ダンプロッシオだ。そういうこともあって、日本のレコード会社やジャズ・ファンと相性がいっそうよくなったのかもしれない。インターネットでヒギンズについて書かれたページを探索してみると、ヒギンズは日本の若い人から年輩の人まで男女を問わず幅広いリスナーに聴かれていることがわかる。タッチの比類なき美しさ、優雅なスイング感やメロディアスなアドリブ、名曲の選曲とその解釈の素晴らしさ、そしてそこからただようジャズ・アートの妙なる香りなどが、音楽を愛する幅広いリスナーから支持されているのである。ジャズ・ファンからジャンルを超えて音楽を楽しむ人々まで、より多くのリスナーの心を捉えることが、そのまま大人気ぶりを示すし、またそれは大人気を獲得するジャズ・アーティストに共通する現象でもある。いいものはいい。実にシンプルなのである。

さて、この《ロマンス四部作》は、2006年10月14～17日の4日間にマンハッタンのクリントン・スタジオでレコーディングされている。4日間で4枚という異例のハイペースでの録音だ。上述したようにヒギンズは、シカゴの“ ロンドン・ハウス ”で活動した後、1970年にフロリダに拠点を移した。夏は故郷から近い避暑地であるコッド岬で活動をしている。奥さんのメレディスともそこで出会った。マイペースな優雅な音楽活動であると思わせる。そうした長年のゆ

A Lovely Way To Spend An Evening

恋に過ごせし宵

Eddie Higgins Trio

エディ・ヒギンズ・トリオ

1. **アイ・クッド・ライト・ア・ブック**

I Could Write A Book (R. Rodgers) (4：27)

2. **涙のかわくまで**

Guess I'll Hang My Tears Out To Dry (J. Styne) (5：55)

3. **パリの四月**

April In Paris (V. Duke) (4：16)

4. **ポルカドッツ・アンド・ムーンビームス**

Polka Dots And Moonbeams (J. V. Heusen) (5：36)

5. **恋に過ごせし宵**

A Lovely Way To Spend An Evening (J. McHugh) (4：07)

6. **ジェントル・レイン**

Gentle Rain (L. Bonfa) (4：40)

7. **君にこそ心ときめく**

I Get A Kick Out Of You (C. Porter) (5：29)

8. **セレナーデ・イン・ブルー**

Serenade In Blue (H. Warren) (5：00)

9. **ボワイ・ワズ・アイ・ボーン**

Why Was I Born (J. Kern) (3：30)

10. **降っても晴れても**

Come Rain Or Come Shine (H. Arlen) (3：53)

11. **今宵の君は**

The Way You Look Tonight (J. Kern) (4：55)

12. **ムーンライト・セレナーデ**

Moonlight Serenade (G. Miller) (5：04)

13. **春の如く**

It Might As Well Be Spring (R. Rodgers) (3：38)

エディ・ヒギンズ Eddie Higgins (piano)

ジェイ・レオンハート Jay Leonhart (bass)

マーク・テイラー Mark Taylor (drums)

録音：2006年10月14～17日　ザ・クリントン・スタジオ、ニューヨーク

©© 2007 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan

Recorded at Clinton Studio in New York on October 14 -17, 2006

Engineered by Troy Halderston

Mixed and Masterd by Venus Hyper Magnum Sound：

Shuji Kitamura and Tetsuo Hara

Front Cover：© The Estate of Jeanloup Sieff / G. I. P.Tokyo

Designed by Taz

とりある活動の中で培い深めてきた独自のピアニズムをこのシリーズで聴くことできる。共演者はベースがジェイ・レオンハート、ドラムがマーティン・テイラーだ。

ジェイ・レオンハートは1940年12月6日、メリーランド州ボルチモア生まれ。ベースの名手として長年ニューヨークで活躍。作詞家でもある。娘のキャロリン・レンハートはジャズ・シンガー。マーク・テイラーは英国出身で、1962年ロンドンのハムステッド生まれ。独学でジャズ・ドラムを修得。プリティッシュ・ジャズ・アワード《ベスト・ドラマー》部門でノミネートの常連だった。96年にニューヨークへ進出。それ以来、タパキンのレギュラー・バンドをはじめ、モンティ・アレキサンダー、ケニー・バロン、モーズ・アリソンなどと共演している。

アイ・クッド・ライト・ア・ブック

「ピウイッチド」なども生まれたミュージカル『バル・ジョーイ』(1940年)の主題歌。リチャード・ロジャースの作曲、ロレンツ・ハートの作詞。“ 恋人の素晴らしさを本にでも書きたい ” という歌詞のラブ・ソング。エディ・ヒギンズの心はずむようなエレガントなスイングが素晴らしい。

涙のかわくまで

音色、ブレイトにも優美この上ないヒギンズの名演が聴けるこの曲は、ジュール・スタイン～サミー・カーンの名コンビが作曲したバラード。フィラデルフィアで試演中に閉幕したミュージカル『Close to See You』(1944年)のナンバーで、フランク・シナトラが得意曲にした。恋を失ったやるせなさを紛らわすような歌だ。

パリの四月

さらりとしたスインギーな演奏が聴けるこの曲は、バーノン・デュークの作曲で、彼の最高傑作といわれるナンバー。E.Y.ハーバークによる歌詞は、春のパリの想い出が綴られている。ミュージカル『ウォーク・ア・リトル・ファスター』(1932年)のために作曲されたジャズの人気スタンダード・ソング。

ボルカ・ドッツ・アンド・ムーンビームス

ジミー・バン・ヒューゼンの作曲、ジョニー・パークの作詞によるラブ・ソング。出版は1940年。ダンスをするときめきを描いたラブ・バラード。フランク・シナトラをフィーチャーしたトミー・ドーシー楽団が最初にヒットさせた。スロー・テンポで演奏されるナンバーで、ヒギンズも気持のこもったゆるやかなスロー・バラードを聴かせる。

恋に過ごせし宵

フランク・シナトラ主演の映画『Higher and Higher』(1944年)のナンバー。シナトラの歌がヒットした。ジミー・マクヒューの作曲、ハロルド・アダムソンの作詞。シナトラはスローで歌ったが、いろんなテンポで演奏される。ヒギンズは快適なメディアム・テンポだ。

ジェントル・レイン

ヒギンズの付けるアドリブは、原曲のイメージから離れすぎないところがいいが、この曲でみせるアドリブは特に素晴らしい。まるで歌が続いているように美しくメロディアスである。1966年の映画『ジェントル・レイン』の主題歌で、ブラジル出身のボサノバ作曲家、ギター奏者のルイス・ボンファが作曲。<黒いオルフェ>に続くボンファの人気曲。

君にこそ心ときめく

作詞作曲家コール・ポーターの名声を決定づけた1934年の大ヒット・ミュージカル『エニシング・ゴーズ』のナンバー。“ アルコールにもコカインにもまいたらないのに、あなたにはかなわない。ぞっこんなんだ ” という歌。ラストはトリオ全体からノリのよさが伝わる軽快な演奏で締めくくられている。

セレナーデ・イン・ブルー

グレン・ミラー出演の1942年の映画『Orchestra Wives』(オーケストラの妻たち)から生まれたナンバー。ハリー・ウォーレンの作曲、マック・ゴードンの作詞。同年グレン・ミラー楽団が大ヒットさせた。ヒギンズのここでのアドリブも聴きもの。

ホワイ・ワズ・アイ・ボーン

ミュージカル『スイート・アデライン』(1929年)のためにジェローム・カーンが作曲、オスカー・ハマースタイン2世が作詞した。ピリー・ホリデイやジミー・スコットらが名唱を残した。スロー・バラードとして歌われることが多い曲だが、このヒギンズのファスト・テンポの解釈は興味深い。

降っても晴れても

ミュージカル『セントルイス・ウーマン』(1946年)のためにハロルド・アーレンが作曲、ジョニー・マーサーが作詞。雨が降っても晴れても愛し続けるという歌。マーガレット・ホワイティング、ヘレン・フォレストの歌がヒットした。人気曲なのでヒギンズも日常的に演奏している曲だろう。アドリブに入ってからもとてもスムーズに進行する。

今宵の君は

1936年の映画『スイング・タイム』(有頂天時代)で、フレッド・アステアが歌って有名になったジェローム・カーン作曲のラブ・バラード。作詞はドロシー・フィールズ。恋のよろこびを全身で表現するようなナンバーだ。ヒギンズ・トリオの演奏は、テーマ、アドリブ共にジャズ・ピアノ・トリオのお手本のようなバージョンだ。

ムーンライト・セレナーデ

グレン・ミラー・オーケストラが1939年にヒットさせて以来、同楽団のテーマ曲になったスイング・ジャズのバラードの名曲。作曲もグレン・ミラー。作詞はミッチェル・バリッシュ。恋人の家の窓の下で歌うロマンティックな情景が綴られる。ここでのヒギンズのアドリブも、聴けば聴くほど深い味わいがある。

春の如く

ミュージカル映画『ステート・フェア』(1945年)の主題歌。リチャード・ロジャース(作曲)～オスカー・ハマースタイン2世(作詞)の名コンビの作品。恋愛の高鳴る思いを春の訪れなどにたとえたナンバーだ。ヒギンズはボサノバ・タッチのスインギーな演奏で、この曲の胸躍るような思いを表現する。

(高井信成)